在原業平の実像と風説

2022 年 10 月 5 日

我部山民樹

1．はじめに

在原業平の人物像と伊勢物語を調べる。

1-1．在原業平

在原業平は（ありわらのなりひら）は、平安時代初期から前期（825～880 年）にかけての貴族・歌人。平城天皇の孫。平城天皇の第 1 皇子・阿保親王（あぼしんのう）の五男。母は桓武天皇の孫・伊都（伊登）内親王（いとないしんのう）であり、由緒正しき皇統である。官位は従四位上・蔵人頭（天皇の家政機関の長官）・右近衛権中将。平城天皇が「薬子の変」（*1）で失脚していなければ皇位に就いた可能性も考えられる。（引用）

六歌仙・三十六歌仙の一人。別称の「在五中将」は在原氏の五男であったことによる。

六歌仙（ろっかせん）；平安時代の 6 人のすぐれた歌人。 そうじょうへんじょう 僧　正　遍　照 ・

ありわらのなりひら　ふんやのやすひで　きせんほうし　おののこまち
在　原　業　平 ・ 文　屋　康　秀 ・ 喜 撰 法 師 ・ 小 野 小 町 ・

おおとものくろぬし
大　伴　黒　主　の 6 人（引用）

三十六歌仙（さんじゅうろっかせん）；藤原公任（ふじわらのきんとう、平安時代中期の公卿・歌人）の『三十六人撰』（さんじゅうろくにんせん）に載っている平安時代の和歌の名人 36 人の総称である。（引用）

*1.

薬子の変（くすこのへん）、または**平城太上天皇の変**（へいぜいだいじょうてんのうのへん）は、平安時代初期に起こった事件。810 年に故・桓武天皇の皇子である平城上皇と嵯峨天皇が対立するが、嵯峨天皇側が迅速に兵を動かしたことによって、平城上皇が出家して決着する。平城上皇の愛妾の尚侍（ないしのかみ）・藤原薬子は服毒自殺し、その兄である参議・藤原仲成は射殺された。平城太上天皇が、若からし親王時代から続いたことであるが、5 人の子持ちだった薬子の色香にからみ取られ、操られたことが背景にあって起きた事変とされ、お粗末極まりない事変と呼ばれている。

藤原薬子；中納言藤原縄主（ふじわらのただぬし）の妻で三男二女の母。幼少の長女が桓武天皇の皇太子・安殿親王（あてしんのう、後の平城天皇）の宮女となるとこれに伴って宮仕えに上がり、東宮宣旨（東宮付きの女房の筆頭）となるが、**やがて娘を差し置いて自身が安殿親王と深い関係**となった。桓武天皇は怒り、薬子を東宮（皇太子の住居する場所）から追放する。**桓武天皇が崩御して平城天皇が践祚（せんそ、天皇に即位）すると、薬子は再び召され尚侍（ないしのかみ）となる。**

尚侍；日本の律令制における官職で、内侍司の長官（かみ）を務めた女官の官名。皇妃に準ずる扱いを受けるようになり、また次官の典侍（ないしのすけ）も天皇の侍妾（じしょう、貴人などのそばにいてその身の回りの世話の世話をする者）としての性格を備えていることが多かった。

内侍司；（ないしのつかさ）は、律令制の後宮十二司の一つ。後宮内の中心的な司、女官のみによって構成された。

業平の人物像は、

【『日本三代実録』（日本の平安時代に編纂された歴史書）の卒伝（プロフィールのようなもの）に「体貌閑麗、放縦不拘。略無才学、善作倭歌」と記され、**昔から美男の代名詞とされるが根拠が無いことではなかった。そして基礎的学力が乏しいが、和歌はすばらしい、ということだろう。**(*2)

歌人として『古今和歌集』の 30 首を始め、勅撰和歌集に 87 首が入集している。『古今和歌集仮名序』において紀貫之が業平を「その心余りて言葉足らず」(*3) と評したことはよく知られている。子の棟梁・滋春、棟梁の子・元方はみな歌人として知られる。兄・行平ともども鷹狩の名手であったと伝えられる。

早くから『伊勢物語』の主人公のいわゆる「昔男」(*4) と同一視され、伊勢物語の記述内容は、ある程度業平に関する事実であるかのように思われてきた。『伊勢物語』では、文徳天皇の第一皇子でありながら母が藤原氏ではないために帝位につけなかった惟喬親王（これたかしんのう）との交流や、**清和天皇女御でのち皇太后となった二条后**（にじょうのきさき、藤原良長の娘・藤原高子（ふじわらのたかいこ））、**惟喬親王**（これたかしんのう）**の妹である伊勢斎宮・括子内親王**（ていしないしんのう）**とみなされる高貴な女性たちとの禁忌の恋などが語られ、先の「放縦不拘**（ほうしょうにして拘らず、物事に囚われず奔放なこと）**」という描写と相まって、高尊の生まれでありながら反体制**

的な貴公子というイメージがある。なお『伊勢物語』成立以降、恬子内親王との間には密通によって高階師尚（たかしなのもろなお）が生まれたという説が派生し、以後高階氏（たかしなうじ）（*5）**は業平の子孫ではないかと噂された。】**（引用）

伊勢物語内では、昔男が関係を持った女性の数、なんと 3733 人！だそうだ。話半分としてもすごい。昔男が在原業平とすれば、業平の女性遍歴は相当派手であったということだろうが、業平の実像からどの程度差異があるのだろうか。

いずれにしても業平の女性遍歴は公然の秘密だったのだろう。

*. 2

「体貌閑麗（たいぼうかんれい)」は顔立ちや姿態が上品で秀麗であり、「放縦にして拘らず」は、性格はのびのびと奔放で、小事にこせこせしない。高尊の生まれでありながら反体制的な貴公子というイメージが浮かぶ。「ほぼ才学なきも善く和歌を作る」は、概していえば、漢詩文の才能は無いが、和歌を上手につくるである。

*3.

歌に込めた情熱が多すぎて言葉が足りていない（表現が不十分)。しぼんだ花がすでに色褪せているのに香りが残っているようなもの

*4. 昔男

日本国語大辞典によれば昔男とは、 「伊勢物語」の各章が「昔、男ありけり」で始まるところから）昔いたある男の意で、在原業平をさしていうとある。

*5. 高階氏（たかしなうじ）

【『伊勢物語』の解釈を典拠として、在原業平と**斎宮・**恬子内親王（てんしないしんのう）の密通によって生まれ、その事実を隠蔽するため、伊勢権守（ごんのかみ、国司の長官）兼神祇伯（じんぎはく、神祇官の長官）であった高階峯緒（たかしなのみねお）が師尚（もろなお）を引き取り、その息子茂範の養子としたとの風説の流布が古くからあり、**後世の各種系図上にも実**

父は在原業平である旨の記載がある。しかしながら、あくまでも伝承の域を出ず、詳細は不明である。

高階氏（たかしなうじ）；日本の氏族のひとつ。天武天皇と尼子娘の長子である高市皇子（たけちのおうじ）を祖とする皇別氏族（日本の皇室から、神武天皇以降に臣籍降下分流・庶流の氏族）で、姓は真人のち朝臣。

系統；天武天皇―高市皇子―長屋王―桑田王―磯部王―石見王―高階峯緒―茂範－師尚―良臣－略

斎宮；（さいぐう/さいくう/いつきのみや/いわいのみや）は、日本の古代から南北朝にかけて、伊勢神宮に奉仕した斎王の御所（現在の斎宮跡）で、平安時代以降は賀茂神社の斎王（斎院）と区別するため、斎王のことも指した。**伊勢斎王**や**伊勢斎宮**とも称する。】

1-2. 伊勢物語

【全百二十五段からなる『伊勢物語』は、在原業平の物語であると古くからみなされてきた。

伊勢物語（いせものがたり）とは、平安時代に成立した日本の**歌物語**（物語文学の重要な一形態で和歌を中心とする短い物語）で、平安時代初期に実在した貴族である在原業平を思わせる男を主人公とした**和歌にまつわる短編歌物語集で、主人公の恋愛を中心とする一代記的物語でもある**。主人公の名は明記されず、多くが「むかし、男（ありけり）」の冒頭句を持つことでも知られる。

平安時代のうち『伊勢物語』は『源氏物語』と双璧をなしており、これらに『古今和歌集』を加えて同時代の三大文学と見ることもできる。】（引用）

全 125 段のうち、「筒井筒」、「芥川」、「東下り」、「狩りの勅使」、「『伊勢物語』の最終話」の 6 話が有名のようだ。

・作者

不詳、作者論は現在も流動的な状況にある。

作者の候補者について以下引用する。

・業平説

【藤原清輔の歌学書『袋草子』や、『古今集注』の著者顕昭（検証、歌人）、さらに藤原定家の流布本奥書（おくがき、最終稿の次に書かれた記事）に、作者は業平であろうと記述があり、さらに朱雀院（すざくいん）の蔵書塗籠本

（ぬりごめほん、平安京の朱雀院における塗籠という書物を保管する場所に収められていた伊勢物語）にも同様の記述があったとする。

紫式部（～1019 年）が書いた「源氏物語」には、「在五が物語」とある。すなわち、在五中将（在原業平のこと）が書いた物語のことであって、紫式部は作者を業平としている。】（引用）

（在五に関する物語ということではない。）

・歌人の「伊勢」（いせ、三十六歌仙のひとり）説

【「伊勢」という題名から作者は延喜歌壇の紅一点の「伊勢」（平安時代の歌人）であるとの説もあり、二条家の所蔵流布本の奥書に伊勢の補筆という記述がある。三十六歌仙のひとり。伊勢御,伊勢御息所とも呼ばれる。父は伊勢守,大和守などを歴任した藤原継蔭。宇多天皇の女御・藤原温子（ふじわらのおんし/よしこ）の女房として出仕,父の任国によって伊勢と呼ばれた。温子の兄である藤原仲平との恋の破局から一時父のいる大和に下ったあと,再び出仕,仲平の兄・時平などとの恋愛ののち,宇多天皇の寵を受け皇子を生んだが,その皇子は幼くして没した。温子の没後,宇多天皇の第 4 皇子・敦慶親王（あつよししんのう）の愛人となり,歌人として知られる中務（なかつかさ、平安時代中期の女流歌人。三十六歌仙、女房三十六歌仙の一人。）を生んだ。『古今集』編集に先立ち醍醐天皇から家集（王朝和歌の世界において、個人または一家の和歌をまとめて収めた**歌集**を指す）の提出を求められ,「**春霞立つを見捨ててゆく雁は花なき里に住みやならへる**」（春霞が立つのを見捨てて北の国へ帰っていく雁は、花のない里に住み慣れているのであろうか、せっかく花の咲く美しい季節になったというのに）など,女性では最高の 22 首が入集。次の『後撰集』には 70 首もの作が採られるなど,宇多・醍醐・朱雀朝にわたって当時の歌風を代表する歌人のひとりとして活躍。華やかな恋愛遍歴の中で生み出された秀歌も多いが,宇多天皇の命により長恨歌屏風の歌を詠進するなど,依頼されて詠作する専門歌人として,屏風歌や歌合（うたあわせ、歌人を左右二組にわけ、その詠んだ歌を一番ごとに比べて優劣を争う遊び及び文芸批評の会）にも多くの歌を詠んでいる。家集『伊勢州集』は冒頭約 30 首に物語的な詞書を伴っており,その部分は特に『伊勢日記』とも呼ばれて,歌物語や女流日記文学とのかかわりが注目されている。やがて最盛期を迎える平安女流文学の先駆者として,『源氏物語』などに与えた影響はきわめて大きく,中世には『伊勢物語』の作者にも擬せられていた。<参考文献>片桐洋一『日本の作家 7/伊勢』,秋山虔『王朝の歌人 5/伊勢』】（引用）

・紀貫之（平安時代前期から中期にかけての貴族・歌人）説

【個人の作者として近年名前が挙げられることが多いのは紀貫之である。このように『伊勢物語』の作者論は、作品そのものの成立論と不即不離の関係にあり、『古今和歌集』（こきんわかしゅう、平安時代の勅撰和歌集）と『御撰和歌集』（ごせんわかしゅう、村上天皇の下命によって編纂された二番目の勅撰和歌集』の成立時期の前・間・後のいずれの時期で成立したかについても説が分かれていた。**しかし近年、『伊勢物語』と実在した業平との間には一線を画す必要があると考えられている。**

現在行われている成立論の一つとして、片桐洋一氏（日本文学者、伊勢物語等の研究者）の唱えた「段階的成長」説がある。元来、業平の歌集や家に伝わっていた話が、後人の補足などによって段階的に現在の 125 段に成長していったという仮説である。ただし増補があったとするには、現行の 125 段本以外の本がほぼ確認できないという弱みがあり、段階的な成長を説くことに対する批判もある。また、最終的に秩序だって整理されたとするならば、その整理者をいわゆる作者とすべきではないか、という指摘も見られる。近代以前の作品の有り方は、和歌にせよ散文にせよそれ以前の作品を踏まえるのが前提であると考えられ、現代的な著作物の観念から見た作者とは分けて考える必要がある。

そのような場合も含めて、**個人の作者として近年名前が挙げられることが多いのは紀貫之である。しかし作者論は現在も流動的な状況にある。】**（引用）

・成立年代不詳　　900 年前後か？
現在行われている成立論の一つとして、「段階的成長」説がある。元来、業平の歌集や家に伝わっていた話が、後人の補足などによって段階的に現在の 125 段に成長していったという仮説である。（片桐洋一氏）

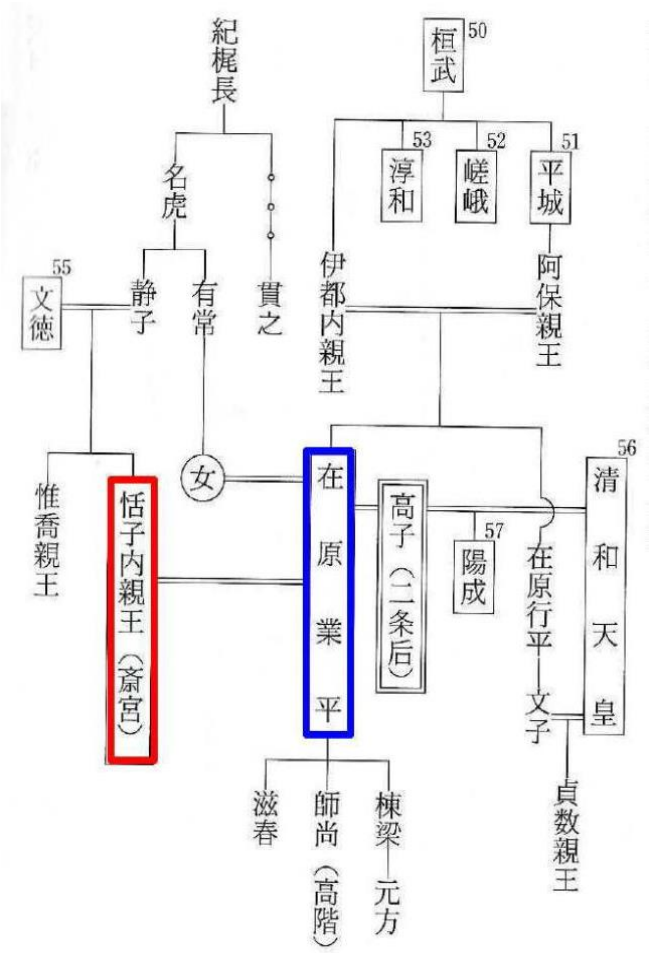
2. 家系図

〇紀氏と在原業平

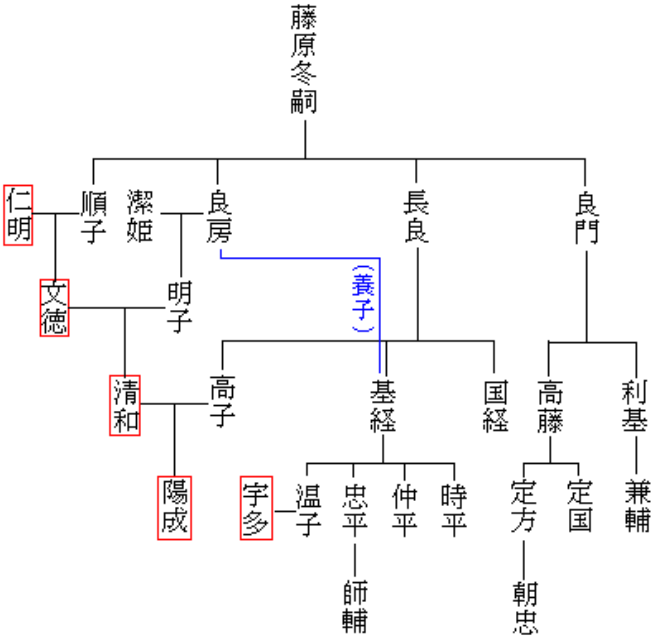
【紀氏は和歌山県にある日前神宮（ひのくまじんぐう）と国懸神宮（くにかかすじんぐう）の両神宮の社家で、その歴史は気が遠くなるほど古い。紀氏は古代から紀伊国に威武をふるっていた出雲族の王家で『古事記』や『日本書紀』『古語拾遺』『紀伊続風土記』などの記録によると、神武天皇が近畿内平定ののち紀州の国王（国造）に封じられた天道根命（あめのみちねのみこと）の直系子孫である。神話の時代を含めると、なんと二千年以上もの長い歳月をくぐり抜けて、いまもなお日前国懸（ひのくまくにかかす、和歌山市）の神に仕えている。

これほどの古い家系を今に伝えているのは、天皇家よりも遥かに古いといわれる出雲の千家・北島の両家。それと、この日前国懸両神宮の司祭者である紀家、あるいは、阿蘇神社の大宮司である阿蘇家ぐらいのものであろう。

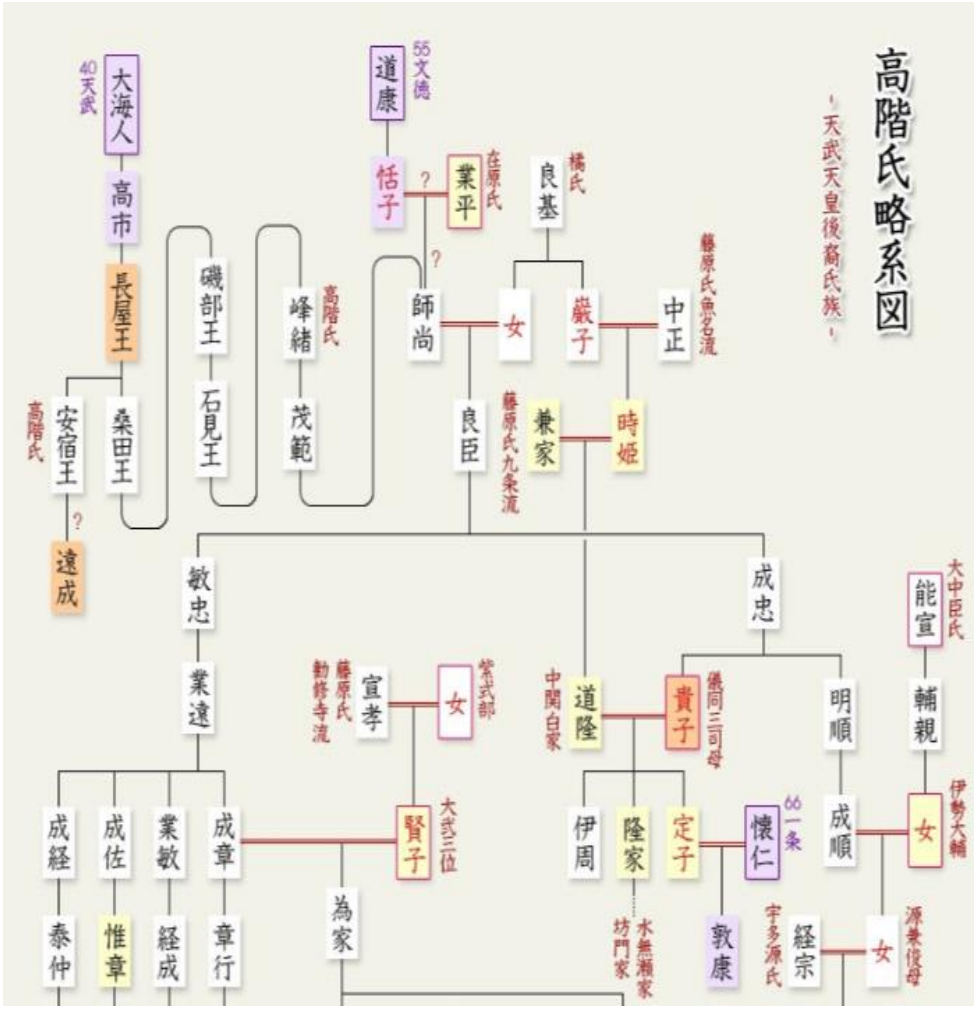
「尊卑分脈家系図」は姓氏調査の基本図書のひとつで、南北朝時代から室町時代初期に完成したが、それには高階師尚は業平の子とされている。】（引用）



○藤原氏



○高階氏



【高階峯緒は伊勢権守となり、斎宮・恬子内親王（てんし/やすこないしんのう）に仕えた。この縁により、伊勢斎宮の恬子内親王と在原業平が密通して生まれた男児を引き取り、師尚と名付け、自らの跡を嗣がせたとする伝承（伊勢物語に描かれる斎宮と業平とされる男の不義密通の逸話）がある。後世の各種系図上にも実父は在原業平である旨の記載があり、また後述されるように、数代後の時代ですら信憑性高く支持されていた。だがこの「師尚隠し子説」は院政期（1086 年～）に入って見られるようになってきた事や国文学の世界では事実無根という説も根強く、さらにまた数代後については後述のような疑いがある。

平安時代中期の高階成忠の時に、娘の貴子が関白・藤原道隆の正室となって一条天皇の中宮・藤原定子を産んだことによりにわかに繁栄し、成忠は従二位に叙せられて高階氏の氏人として初めて公卿に昇進するとともに、真人姓から朝臣姓に改姓した。しかし、定子の生んだ敦康親王の即位は藤原道長により、道長自身の権力を強固にするため、また敵対関係であった中関白家（道隆の）を追い落とすために妨害された。前述の「**師尚隠し子説**」により、道長の側近で一条天皇の寵臣でもあり、当時の朝廷で故事に優れた知識人として知られた藤原行成はこの時の権記「（行成の日記）で「**高階氏の血を引く敦康親王の即位は、伊勢神宮の怒りを買う」と進言したことがひとつの要因となった。**この頃中関白家もほぼ権力闘争に敗れた状態であり、高階成忠の子孫は中関白家と共に没落する。】（引用）

3. 当時の主な年表と伊勢物語による風説

業平　　高子　　括子内親王

年代	主な出来事	伊勢物語の昔男を業平と同一視しての風説
810 年	・9 月、平城上皇は「薬子の変」で失脚し、直ちに剃髪して仏門に入る。 ・平城天皇の第 1 皇子・阿保親王（あぼしんのう）は連座して大宰権帥（だざいのごんのそち、太宰府の権官）に左遷される。	
823 年	第 53 代・淳和天皇（じゅんなてんのう）が嵯峨天皇より譲位され、即位する。	
824 年	・叔父の嵯峨天上皇によって、阿保親王（あぼしんのう）が入京を許される。	
825 年	業平、生まれる	

826 年	阿保親王が子息の行平・業平等に在原朝臣姓を賜与され臣籍降下させる。	
833 年	第 54 代・仁明天皇（にんみょうてんのう、嵯峨天皇の皇子）が譲位を受け即位する。	
838 年、	藤原淑子（ふじわらのしょくし/よしこ、高子の姉)、産まれる	
840 年	・淳和天皇（じゅんなてんのう，嵯峨天皇の弟）が崩御。 ・業平、この頃に元服する。	伊勢物語「初冠（ういこうぶり)」(*6) （初冠とは、元服の儀式のときに初めて冠を着けること）
842 年	「承和の変」 ・嵯峨上皇（さが）が没して 2 日後、先帝の第 53 代・淳和天皇（じゅんなてんのう、嵯峨上皇の弟）の皇子で第 54 代・仁明天皇（にんみょう、嵯峨天皇の皇子）の皇太子だった恒貞親王（つねさだしんのう、母親が橘嘉智子の娘・正子内親王）が陰謀を企てたとして位を逐われた。 橘逸勢（たちばなのはやなり）以下 60 数名が連座した。 ・仁明帝の皇子・道康親王（みちやすしんのう、後の第 55 代・文徳天皇）が新皇太子となり、藤原良房（よしふさ）が摂政となった。皇太子の母は藤原北家冬嗣の娘・藤原順	

	子（のぶこ）で、その兄の良房の画策と云われている。 嵯峨天皇の皇后で仁明天皇の母・檀林皇后は橘氏出身だが、藤原北家と手を結んだのであろうといわれている。檀林皇后に謀反の密書を送ったのは阿保親王とされている。 ・藤原高子（ふじわらのたかいこ）、生まれる。	
844 年	惟喬親王（これたかしんのう）、生誕する	
845 年	業平、左近衛将監となる。	
848 年頃	括子内親王生まれる。	
849 年	業平、従五位に叙せられる	
850 年	仁明天皇が崩御。第 55 代・文徳天皇（もんとくてんのう）が即位。惟仁親王（これひとしんのう、父親；文徳天応、母親；藤原明子、後の清和天皇）が立太子	
855 年頃 （業平、31 歳位、藤原高子、14 歳くらい？）		『伊勢物語』の「芥川」(*7) や『大和物語』などを史実とする見解からは、入内（じゅだい）する以前に在原業平と高子は恋愛関係があったと推測されている。
858 年	・文徳天皇が崩御。 ・清和天皇が 9 歳で即位する。高子（16 歳）が、即位にともなう大嘗祭	

	において、五節舞姫（ごせちのまいひめ）をつとめる。これは将来の后妃候補として入内する前提。 ・惟喬親王（これたかしんのう）が14歳で現在の福岡県、大宰権帥に任ぜられる。	
859年	・括子内親王（てんし/やすこないしんのう）、清和天皇の即位にともなって斎宮に卜定。（ぼくじょう、亀の甲を焼いて、現れた割れ目をみて吉凶を占って決められた）。 ・高子、無位から従5位下に叙せられる	『伊勢物語』の「東下り」（*8）はこの頃か？ 昔男（業平）は東下りをするが、母・（伊都内親王）の手紙を貰って京に戻った。
861年 （業平37歳）	・業平の母·伊都内親王，死去 ・文徳天皇の皇女・括子内親王が13歳にて第31代伊勢斎宮として下る。 ・858～876年間に「狩りの使」が行われたという記録はない。（行なわれなかったとの説が有力。（片桐洋一氏） ・高階峯緒、伊勢権守に叙せられる	・『伊勢物語』では、「狩の使」と「斎宮なりける人」は逢ったが、**ついに遂げることは出来なかったと書いている。**が、「斎宮なりける人」により（*9）、恬子内親王、「狩りの使い」が業平とみて、**この一夜の契りにより内親王が懐妊、前代未聞の不祥事となる。**発覚を恐れた斎宮寮（伊勢神宮に奉仕していた未婚の皇女斎宮一般の世話を職掌とする。）が、生まれた子供を伊勢権守で斎宮頭だった**高階峯緒の子・茂範の養子とし、それが後の高階**

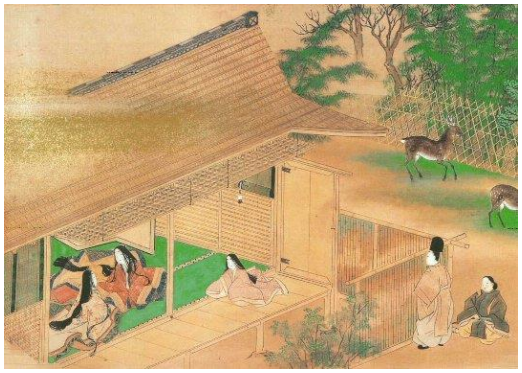
		師尚であるということが、古来流布されている。
862 年	業平、正 6 位と書かれている。これ以前に従 5 位から降格されたことになる。が、書き間違いとの説がある。	
864 年頃？	高階師尚（たかしなのもろなお）生まれる。	
864 年	・清和天皇、元服する ・業平、左近衛権少将(さこんえごんのしょうしょう)となる。	
866 年 （業平 42 歳）	・藤原高子、25 歳で清和天皇に入内（じゅだい、后妃が内裏(だいり)に参入すること）し女御（にょうご、天の侍妾(じしょう)の一つ）となる。女御の入内は事実上天皇の結婚の儀礼となり、盛大な儀式が行われた。）	
868 年	高階峯緒、従四位上。正月：山城守。2 月：神祇伯に叙任される。	
869 年	高子、貞明（さだあきら、のちの第 57 代・陽成天皇）を産む。生後約 3 か月で立太子する。	
872 年	惟喬親王が病のため出家して素覚と号し、小野（伊勢物語八十三段によると比叡山山麓とあり、近江と大原の説がある）に隠棲した。	

875 年 （51 歳）	業平、従四位上･右近衛権中将（うこんえごんのちゅうじょう）となる。	
876 年	・括子内親王、斎宮を退下 ・皇太子・貞明が第 57 代・陽成天皇（ようぜい）に即位する。藤原基経が摂政になる。	
879 年	業平、蔵人頭（くらうどのとう）に補せられる。	
880 年	業平、卒去。（享年 56）	『伊勢物語』の最終話 「つひにゆく道」 **むかし、男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを** （昔、男が病気になって今にも死にそうに思えたので、（歌を詠んだ）。「最後には、通っていく道だとはかねてから聞いていましたが、昨日・今日にも死んでしまうとは思わなかったなぁ」）
881 年	清和天皇、崩御。	
887 年	宇多天皇、即位する	
889 年	（高子は、宇多天皇の時、元慶年代（877～885 年）に東光寺を自らが建立した）	

	48 歳の高子が東光寺の座主・善祐（ぜんゆう）の子を孕んだとの噂が流れ、宇多天皇が日記の中で嘆いた。	
896 年	（噂から 7 年後に）東光寺の座主・善祐と密通したという疑いをかけられ、皇太后を廃される。善祐は伊豆に流刑となる。	
897 年	・宇田天皇の生母・班子女王（はんしじょうおう）が皇太夫人（こうたいぶにん）から皇太后に進む	
910 年	高子、崩御	
913 年	括子内親王，薨去	
930 年	朱雀天皇（生母；高子）、即位する	
943 年	高子は、没後に朱雀天皇の詔によって（詞を濁して、言葉を濁して）復位される。	

*6. 初冠（ういこうぶり）

昔、とある男が、元服して、奈良の都（平城京）の春日の里に、その土地を領有している縁で、狩りに出かけました。その里に、たいそう若々しくて美しい姉妹が住んでいました。



この男は、（その姉妹を）物影からこっそりと覗き見てしまいました。（京の都ではなく）思いがけず（このような寂れた）旧都に、たいそう不釣り合いな様子で（美しい姉妹が）いたので、（男は）すっかり心を乱してしまいました。

男は、着ていた狩衣の裾を切って、（それに）歌を書いて（姉妹に）贈ります。その男は、しのぶずりの狩衣を着ていました。

すぐに（詠んで）言い送りました。（ことの）次第を趣があることだと思ったのでしょうか。（この歌は、）

春日野の　若紫のすりごろも　しのぶの乱れ　かぎり知られず

（春日野には紫草のみならず、あなた方の匂い立つ若さが充ちて、私の心もあなた方姉妹の美しさ、あでやかさに染まってしまいました。この布の忍摺（しのぶず）り模様のように、私の心は乱れています。野の草々ならば、やがて静まるのですが、この布の模様は消えてはくれないものです。ひたすら忍んでおります。）

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに

（陸奥のしのぶもじずりの乱れ模様のように、あなた以外の誰のために心が乱れ初めた私ではないのに）

という昔の歌の趣向を踏まえたものです。昔の人は、このように（心を動かされた女性にすぐ恋の歌を贈るといった）激しい風流な振る舞いをしたのでした。

ところで、この女性は、藤原有子との説がある。それなら、一緒にいたのは三歳の淑子で、藤原高子の姉になる。（田辺聖子氏）

*7.「伊勢物語」の「芥川」

「伊勢物語」第６段に歌われている悲恋の物語

① 昔男があった。とても得ることができそうもない女と愛し合うようになり、命がけである晩とうとうその女を盗み出してしまった。芥川という川のほとりを、女を背負って逃げているときに、草に夜露が光っているのを見て女が、「青のキラキラ光るものは何？」と聞いた。しかし男は焦っているのでそれに答えず、先を急いだ。

夜も遅いので男は近くの小屋に女をつれ込み奥で休ませて、自分は入口で見張っていた。ところがその小屋は鬼が出る小屋だった。女が悲鳴を上げたが雷の音に紛れてその声は男には届かなかった。気が付いた時には女は鬼に喰われてしまっていた。

男は夜明けになってやっと気が付き、さめざめと泣いてこう歌った。

白玉か、何ぞと人の問いし時、露と答えて、消えなましものを

（あれは真珠ですか、何ですか」と（あの人が）尋ねたときに、「（あれは）露だよ」と答えて、（その露が消えるように私も）死んでしまえばよかったのに。）

② これ(＝この話)は、二条の后が、いとこの女御のお側に、お仕えするようにして(身を寄せて)おいでになったが、(后の)容貌がたいそう素晴らしくていらっしゃったので、(男が)盗んで背負って出て行ったのだが、(后の)兄上の堀河の大臣、長男の国経の大納言が、まだ官位の低い役人として宮中へ参上なさる時に、ひどく泣く人がいるのを聞きつけて、(男を)引きとどめて(后を)取り返しなさったのであった。

それをこのように鬼と言ったのであった。
まだたいそう若くて后が普通の身分でいらっしゃった時のこととか。

注釈

「伊勢物語」第６段にうたわれている悲恋である。男は在原業平、女は藤原高子（ふじわらのたかいこ）と言った。二人は愛し合っていたが、高子の父・藤原基経に取り戻されてしまったものである。しかし、それは悔しいので鬼に喰われてしまった、という話にしてしまったのである。

後日談になるが、

結局、藤原高子は清和天皇に嫁ぎ，２人の皇子と１人の皇女を産み、長男・貞明親王８さだあきらしんのう）は皇太子となる。３人の子供ができたとはいえ、夫婦仲は決して良いものではなく、天皇の思いは藤原良相の娘・多美子のもとにあった。高子の思いは常に業平のもとにあった。歌の会などで接する機会はあったようである。

やがて、清和天皇が退位、高子の子である貞明親王が新天皇（陽成天皇）になる。高子は天皇の母という立場を利用して、業平をどんどん出世させ頭中将（いまでいえば内閣官房副長官のようなもの）に取り立てる。

千早振る（ちはやふる）、**神代も聞かず、龍田川、唐紅**（からくれない）**に、水くくるとは**

と詠んだ。

（私の燃える想いが、激しい水の流れを真っ赤に染め上げてしまうように、紅くまだらに錦を作っています。何と華やかで哀れでしょう。神の代から今日、更に後世まで、この鮮やかさは色あせません。今でもあなたを愛しています）

美しい純愛であった。（田辺聖子氏）

【この歌は「屏風歌」です。屏風歌とは、屏風に描かれた絵に合わせて、その脇に和歌を付けたものです。
古今集の詞書には「二条（にでう）の后（きさい）の春宮（とうぐう）の御息所（みやすどころ）と申しける時に、御屏風（みびゃうぶ）に龍田川に紅葉流れたる形（かた）を描きけるを」とあります。
二条の后とは、藤原長良（ながら）の娘の高子（たかいこ）のことで、清和天皇の女御（にょうご＝天皇の側室）でした。その二条の后が、春宮（皇太子）の御息所（みやすどころ、＝皇子を生んだ女御）だった頃、**后の屏風に竜田川に紅葉が流れている絵が**

描かれているのを、作者の在原業平が見て、付けた歌だということです。】

*8. 東下り

①昔、男がいた。その男は、〔自分の〕身を役に立たないものと思い込んで、京にはいるまい、東の〔国の〕方に住むのによい国を見つけようと思って行った。以前から友とする人、一人二人と一緒に行った。道を知っている人もいなくて、迷いながら行った。三河の国の八橋というところに着いた。そこを八橋といったのは、水が流れる川が蜘蛛の足のように八方にわかれているので、橋を八つ渡していることによって、八橋といった

その沢のほとりの木の陰に降りて座って、乾飯を食べた。その沢にかきつばたがたいそう美しく咲いていた。それを見て、ある人が言うことには、「かきつばたという五文字を〔和歌の〕各句の上に置いて、旅の心を詠みなさい。」と言ったので、〔男が〕詠んだ〔歌〕。

『風流錦絵伊勢物語』第 9 段

「東下り」墨田川の景

唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

（衣を着ているうちにやわらかく身になじんでくる褄のように、なれ親しんだ妻が(都に)いるので、(その妻を残して)はるばると遠くまでやって来た旅を、しみじみと(悲しく)思うことだよ。）

と詠んだので、一行の人は皆、乾飯の上に涙を落として(乾飯が涙で)ふやけてしまった。

②（それから東へと旅を）さらに進めて行って駿河の国に到着した。
宇津野山に着いて、自分が踏み入ろうとする道は、たいそう暗く細い上に、つたやかえでが茂り、なんとなく心細く、思いがけない（つらい）目に合うことだと思っていると、修行者が（やって来て、男に）出会った。
「このような道に、どうしていらっしゃるのですか。」
と言うのを見ると、（なんとその修行者は、以前都で）会ったことのある人であった。
都の〔愛する〕その人のもとにと思って、〔男は〕手紙を書いてことづけた。

駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり

（駿河にある宇津の山のように、現実でも夢でも〔愛する〕人に会えないのであることよ）

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

（富士山を見ると、五月の下旬なのに、雪が降っている。）

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ

（時節をわきまえない山は富士の山だ。〔今を〕いつと思って鹿の子模様のまだらのように雪が降っているのだろうか）

その山（＝富士山）は、ここ（＝都）でたとえると、比叡山を二重ほど積み上げたようなほど〔の高さ〕で、形は塩尻のようであった。

③さらに進んで行って、武蔵の国と下総の国との間に、たいそう大きな川がある。それを隅田川という。その川のほとりに〔一行は〕集まって座って、〔旅を〕振り返ると、この上なく遠くに来たものだなあと互いに嘆きあっていると、渡し守が、「早く舟に乗りなさい。日も暮れてしまう。」と言うので、〔一行は舟に〕乗って渡ろうとするが、〔一行の〕人はみななんとなく悲しくて、〔それは〕都に思う人がないわけでもない〔からだ〕。ちょうどそのとき、白い鳥で嘴と脚とが赤く、鴫の大きさの鳥が、水の上で遊びなが

ら、魚を食う。都では見かけない鳥なので、人はみな〔何という鳥なのか〕わからない。渡し守に尋ねると、「これは都鳥です。」と言うのを聞いて、

名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

（〔都という言葉を〕名前として持っているならば、さあ尋ねよう都鳥よ。私が〔愛しく〕思う人は〔無事で〕いるかどうか）

と詠んだので、舟〔の人〕はみんな泣いて

しまった。

業平は都に戻ってくるが、忙しくて母親を見舞えない。急な用事として

母親からの手紙を貰った。こんな歌が書いてあった。（田辺聖子氏）

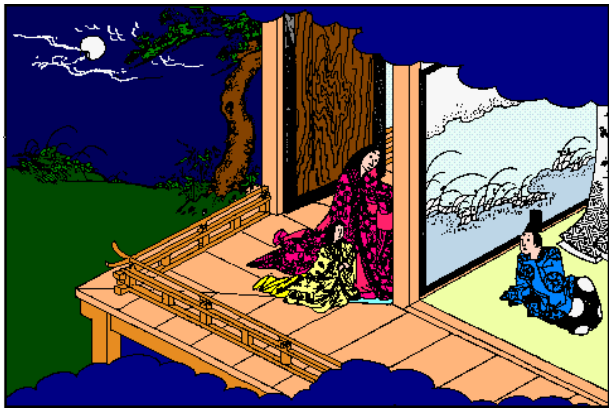
おいぬればさらぬ別れのありといへば　いよいよみまくほしき　君かな

（年とると避けられない別れがあるというではありませんか、それを思うといよいよそなたにお会いしたい、来てお顔を見せてください

*9. 斎宮なりける人

第六十九段に、「斎宮なりける人」という呼び名で登場する女がおり、古来よりこれを恬子内親王本人とする解釈がある。

その「斎宮なりける人」のもとに、親（女を恬子内親王とした場合、通説では紀静子）から一通の手紙が届く。そこには近々勅命により「狩の使」（平安時代初期、朝廷の用にあてる鳥獣を得るために、諸国に派遣されて狩りをした勅使。）が下向するが通常よりは丁重にもてなすように、と記されてあった（この「狩の使」が、内親王の従姉（紀有常の娘）の夫であり、平城天皇の孫でもある在原業平と考えられている。紀有常と内親王の母・紀静子が兄弟である。）。女は親の言うとおり、きちんと心をこめてもてなした。男は丁重なもてなしに感動し、女に恋心を抱いてしまう。そして「逢いたい」と言ったという。女も男に惹かれていたらしく、「絶対逢ったりはしまい」とは思っていなかったのだが、人目が多く、逢うことができなかった。だが、人が寝静まった子の一刻（夜中の 11 時ごろ）、女が女童を先に立たせ、女のことを思って眠れずにいた男の寝所までやって来た。男はたいへんうれしく思い、彼女を寝所に迎え入れた。



そして丑三つ時（午前 2 時ごろ）まで一緒にいたが、何も語り合えずにいるうちに（思いを遂げられずにいるうちに）、とうとう女は帰ってしまった。男は悲しく、その後も眠れず、翌日も女のことが気にかかって仕方がなかったが、自分のほうから様子を尋ねるわけにはいかなかったので、非常に心細く待ちわびていると、女から

君や来し 我や行きけむ おもほえず 夢かうつつか 寝てかさめてか

（昨夜はあなたがいらっしゃったのでしょうか、私が行ったのでしょうか、あなたとの逢瀬も、夢だったのでしょうか、それとも現実だったのでしょうか）

という、詞書（ことばがき、歌の題や歌を詠んだ事情などを述べたもの）のない歌が贈られて来たので、男は激しく泣き

かきくらす 心の闇に まどひにき 夢うつつとは こよひさだめよ
（私も、あなたへの募る想いで惑ってしまいました。今宵こそ、夢か現実かを定めましょう）

と返した。そして日中、狩に出たが、心は上の空で、早く夜にならないかと待ち望んでいた。だが、伊勢国の国司で斎寮の長官も兼任している人が、狩の使が来ていると聞き、一行を招いて一晩中宴をはり、ついに再び女に逢うことはできなかった、という。

『伊勢物語』では、**「狩の使」と「斎宮なりける人」はついに思いを遂げることは出来なかったことになっている。**が、「斎宮なりける人」を恬子内親王とみて、この一夜の契りにより内親王が懐妊、前代未聞の不祥事が発覚することを恐れた斎宮寮が、生まれた子供を伊勢権守で斎宮頭だった高階峯緒の子、茂範の養子とし、それが後の高階師尚であるということが、古来流布されており、後の「藤原行成の権記」（ふじわらゆきなりのごんき、行成の日記）によると、行成（972～1028 年）は一条天皇から立太子について、定子皇后（（ていしこうごう、父；藤原道隆、母；高階貴子）腹の敦康親王（あつやすしんのう）と彰子中宮（父；藤原道長、母；源倫子）腹の敦成親王（あつひらしんのう、後の後一条天皇）のどちらにすべきかについて意見を聞かれた時、「高氏ノ先ハ斎宮ノ事ニ依リ其ノ後胤為ル者ハ皆以テ和セザル也」と定子皇后と高階貴子の母の高階貴子が高階氏出身ということを理由に敦成親王を立太子すべきと奏上したとある。事実かどうかは別として、その後の尊卑分脈にもそのように記されている。（政権では事実だと信じられていたということ。）だがこの権記の部分は高階氏が隆盛した院政期から流布し後世の加筆かとも言われており、それに**「狩の使」が師尚の生年に当たる清和朝（858～876）に行われた記録はなく仮に内親王との間の懐妊が本当だとしても実父は業平ではなく別人という可能性も否定できない。**

4．検討のための前提を確認

①「斎宮なる人」の狩りの使い

勅命を受けて諸国に使いし、禽獣を狩ってその土地が朝廷の支配下にあることを確認することによって国家を祝福する行事のことなのだが、すでに契沖（けいちゅう、江戸時代の国学者・歌人）も言っているように（「勢語臆断」

（せいごおくだん）の中で）、**業平が活躍していた清和天皇の時代には「狩りの使い」が行われていなかったことに注意しなければいけない。清和天皇は仏教を深く信じ、慈悲深く、鷹狩もしなかったというので、当然だったと納得できる。**当時の読者は事実譚ではないことを誰もが知った上で、楽しんで享受していたということになる。（片桐洋一氏）

勢語臆断；江戸前期の注釈書。4 巻。契沖著。1692 年ごろ成立。1802 年。伊勢物語の古注を検討・批判し、新鋭を加えたもの。

②斎宮

斎宮は、未婚の内親王が父または兄弟にあたる天皇に代わって皇室の氏神である伊勢大神を鎮撫すべく奉仕する職務であったから、これと密通するということは、神を侵すとともに国家の体制を乱す大事ある。現実にあり得ることではないし、たとえあったにしても、**密通した人が斎宮の任期を全うし得るはずもなかったのであるから、逆に言えば、伊勢物語を楽しむ誰もが架空の話だとする前提があったということになる。**（片桐洋一氏）

③史実の確認

・恬子内親王が斎宮として伊勢に赴任した。

・当時、高階峯緒が伊勢権守で斎宮頭だった。

・高階峯緒の子は令範、茂範、佐文の 3 人で後継は茂範だった。茂範,佐文には子供の記録がない。茂範の子・師尚に兄弟はいない。

・当時、「狩りの使い」は行われていなかった。従って業平は伊勢に行っていなかった。

・斎宮が懐妊したとか、子供を産んだという記録はない。（もし、仮にそうだったとしても隠し通せるはずがない。）

・恬子内親王は長き（861～876 年）にわたって、斎宮として仕えた。

・業平の妻・紀有常の女（娘）と恬子内親王は従姉妹（内親王の母は紀静子）

④前提条件

・師尚は養子だったし、周辺の人には公知の事実だった。だが、本当の親は世間に公表していなかった。すぐには恬子内親王の隠し子とすることは出来なかった。

（実子であれば、このような話が出るはずが無いし、もし出てもすぐに打ち消されていたはずである。）

実子であったなら、高階氏が養子とするはずが無いし、「師尚隠し子説」は世間からすぐに打ち消されていたはずである。

5. さいごに

「狩りの使い」は行われなかったので、業平は伊勢には行っていない。

業平の妻の従姉妹が、斎宮として赴任した後、業平はある程度伊勢や斎宮の情報を有していた。親友・惟喬親王（これたかしんのう、恬子内親王の兄）との交流を通じて恬子内親王にほのかに好意を抱いていたが、恬子内親王が斎宮に卜定（亀の甲を焼いて、現れた割れ目をみて吉凶を占って決められた）し、やがて伊勢に下ってしまった。成長した恬子内親王一目会って思いを告げたいものだが、かなわない。やがて自分が伊勢に赴いて、逢瀬することを夢想する。

「狩りの使い」で伊勢に赴くことになれば、恬子内親王に逢えるのではないかと夢想した。そこで昔男が「狩りの使い」として伊勢に赴くことになって、逢瀬がかなうような歌を詠み、物語を作ってみた。勿論、斎宮と密通することはタブーであり、念願の逢瀬は出来たが、思いは遂げられなかったとし、逢瀬は夢かうつつか定かでないと曖昧にした。

恬子内親王は業平と密通はしていなかったし、ましてやその間に子供などいなかった。もし懐妊し、子供を産んだとしても業平との間の子ではなかったろう。密通し、懐妊したことが事実なら必ず天皇からとがめられていただろう。しかし、斎宮を長き（859～876 年）にわたって全うしているので、天皇からの御咎めがなかったのだろう。

斎宮は業平との密通はなかったし、まして懐妊はしていなかったということだ。

高階師尚に兄弟はいなかった。高階茂範に実子がいたけれども、恬子内親王の子・師尚をやむを得ず養子に引き取ったということではない。実子がいなかったから仕方なく養子を迎えて後継者にしたという話の方が的を射ている。養子が誰の子供かは別にして。

業平は自分の夢想をオリジナルのストーリーとして創作した。それがオープンになった時に、読者は誰もが、本当は逢瀬の時に一線を越えたのではないかと疑ったはずだが、一夜の契りで懐妊し、子供が生まれたとまでは想像だにし

なかったはずである。その後、養子を「恬子内親王の隠し子」としていた高階氏が伊勢物語の存在を知って父親は業平と周辺に説明した。師尚の両親共が天皇家の血統であるとした。この高階家の野望（*9）により、この話が世間に流布し、多くの脚本家がストーリーをさらに面白くするために伊勢物語を改編し、様々な風説を産んでいったのであろう。全般にわたって、物語のオリジナルに無かったはずの業平の他の歌や、詠み人知らずの歌も業平の作品とされ、多くの脚本家がそれらを伊勢物語に付け加えていったのであろう。**いずれにしても伊勢権守の高階峯緒が関与しなければ、養子が業平や恬子内親王の子供であるという話は出てこなかったはずである。**

「芥川」のベースの藤原高子との恋愛は本当だったのだろう。相思相愛で、駆け落ちを試みたが、藤原氏の野望のために高子の兄弟たちによって阻まれてしまう。本当に口惜しく、藤原氏に腹立たしくて、このことを書き残すために、伊勢物語を書くことを思いついたのであろう。

藤原氏の野望のために相思相愛だった藤原高子との関係は引き裂かれたうえに、業平にとって雲上の人になってしまい、親友・惟喬親王（これたかしんのう）は大宰府に赴任させられたので、会えなくなってしまった。密かに好意を抱いていた恬子内親王は斎宮として伊勢に下ってしまった。それに藤原氏の横暴にわだかまりがあったのかもしれない。

異説として、藤原氏の専横に対して憤ることの多かった在原業平が、藤原氏に対する報復のために、あえて高子と通じたという意見も根強いようだが、その後の業平の昇進、在原氏と藤原氏がその後に結んだ姻戚関係を考慮するとその説は大いに疑問である。

業平はいっその事、京の都を離れて東下りができればと空想し、それに因んだ歌を 2 首詠んだ。

・唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

・名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

「東下り」の中でこの２首のみが業平自身の作であると判断できる。（片桐洋一氏）

この 2 首をベースにして、他の脚本家が詠み人知らずの歌を業平の歌とし、さらに業平一行が東下りしたものとしてのストーリーを創作し、「東下り」として伊勢物語に織り込んだものと推測される。

*9. 高階家の野望

高階茂範に子供ができなかった。その原因はおそらく兄弟 3 人共男側の問題だったと推測する。そこで、茂範は高階家存続のために養子を迎える。その養子は天皇系の血統ではなかった。世間では誰の子供だろうかと噂をし、あるいは聞きにくる者もいただろう。

高階家は天武天皇の皇子・高市皇子を祖とする皇族氏族で、由緒ある家柄であるが、養子が天皇系統で無かったので、このままでは天皇家の血筋が途絶えることになってしまう。伊勢物語が流布された頃（900 年前後？）は定かではないが、業平は 880 年に死没しているので、それ以前だろうが、存命中に周辺には物語を見せていただろうし、見た人は、まずは伊勢権守の峯緒に真実かどうかを問い合わせたであろう。だから峯緒は相当早い段階で、「斎宮なりける人」を知っていたに違いない。

高階峯緒に関する最後の記録は 868 年であるが、死没年（誕生年も）不明は分からないが、880 年くらいまで存命だったのではなかろうか。

伊勢神宮の神祇伯であった高階峯緒が自分の立場を利用して、周辺に対し「秘密の話だが」と前置きしながら、「実は息子・茂範の養子・師尚は恬子内親王が密通してできた子を引き取った。紛れもない天皇家の血筋である」としていたが、そのうちに父親を追求され、「斎宮なりける人」を知った段階で峯緒は父親が業平で、両親共に天皇の血筋であるとのストーリーを考え、秘密の話なので口外しないで欲しいと言いながら、それを広めていったのではなかろうか。

更に高階家の家系図にそれを織り込んで周辺に流布させたのではなかろうか？

業平の思いを込めた物語に様々な話が織り込まれて、業平の思いをはるかに超えた内容の風説が出来上がり、拡散していったのだろう。913 年に薨去された恬子内親王の晩年の記録はないが、晩年は世間とは隔絶されていた生活環境だったのではなかろうか。「隠し子伝説」の噂が届かなかったのか、あるいはそれが届いていたにしても、その頃はもう世事から超然としていたので、笑い飛ばしたか、無視したのかもしれない。

恬子内親王の薨去以降は事実を知る関係者が誰もいなくなってしまったので、否定する者がいなくなってしまった。架空の話と受け取って楽

しんでいた人々も、やがて高階氏（たかしなうじ）の家系図を信じるようになってきた。

高階家の野望によって、養子の本当の親として業平と恬子内親王を家系図に書き入れたため、より真実味が増した。様々に想像を駆り立てられるうえに、業平が思いを遂げられなかったと書いているが、本当は契りがあったのではないかと噂していた世間の人はあり得る話でもあると受け取ったので、密通事件と隠し子の話がまるで事実かのように受け入れられ、流布していった。

南北朝時代（1337 年以降）から室町時代初期に完成した「尊卑分脈家系図」は姓氏調査の基本図書のひとつだが、それには**「高階師尚は業平の子」として記載された。高階家の家系図を基に書き加えられたのであろう。確実な当時の史料がないため、誰も否定できなかった。**

伊勢物語は多くの脚本家の想像と思惑が追記され、改編されていった。それを業平の史実のように解釈したため、実像とかけ離れた業平の人物像が風説として流布されたのであろう。確実な史料がない上に、尊卑分脈家系図が正とされた時期もあり、今日まで議論が続いているのだろう。

参考資料

・田辺聖子氏；在原業平

・高樹のぶ子氏；伊勢物語　在原業平　**恋と誠**

・高樹のぶ子氏；小説伊勢物語　**業平**

・片桐洋一氏；天才作家の虚像と実像　**在原業平　小野小町**

・ウイキペデイア

以上